

れき 民

となん歴史民だより vol.21

Morioka tonan history and folklore museum

平成21年12月15日発行

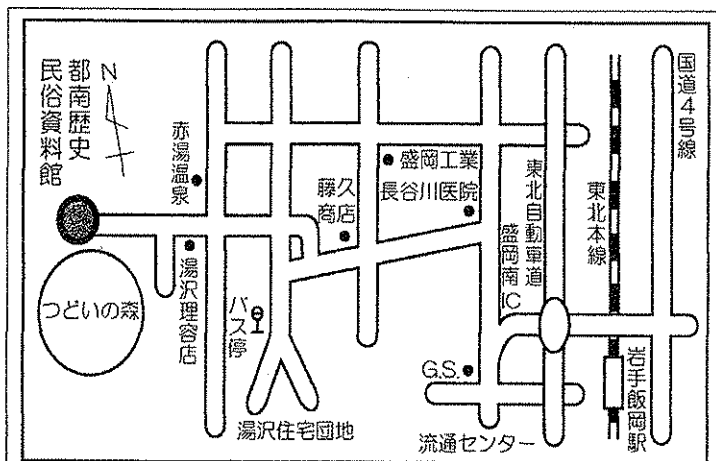
発行 盛岡市都南歴史民俗資料館 盛岡市湯沢 1-1-38 Tel.019-638-7228



— もくじ —

- ・〈寄稿〉
- 盛岡藩・大奥にいた“最上奥”の横暴
- ・盛岡藩領内に伝わった『たとえ』⑤
- ・資料は語る②
- ・史跡文化財めぐり報告
- ・特別企画展「収蔵古文書展」報告
- ・市民参加展「謎の陶磁器～柳模様～」報告
- ・盛岡市所在 指定・登録文化財紹介②
- ・となんの昔ばなし②

MAP☆ACCESS



○利用案内

- 開館時間 午前9時から
午後4時まで
- 入館料 無 料
- 休館日 月曜日
(休日に当たるときは、
直近の平日)
年末年始

盛岡藩・大奥にいた“最上奥”の横暴

盛岡市都南歴史民俗資料館 館長 田 鎖 壽 夫

大奥とは通常江戸城の本丸で将軍やその妻、妾が生活した場所をいう。大奥は将軍の私生活の場、中奥は日常生活の場とともに執務の場で、この間には御錠口が設けられ、将軍以外男子禁制の大奥を守っていた。ここには将軍の妻や妾に仕える大奥女中衆が数多く仕え、その諸経費は幕府の財政をも圧迫したともいわれている。

大奥は幕府に限らず、諸藩にも設けられていて、盛岡藩においても「ご内室」と「世子」は江戸の上屋敷で暮らし、盛岡城本丸の大奥には御妾にあたる女性と女中衆の居住区となっていたのである。盛岡藩史を集録した「南部史要」にも大奥に関連する記述が散見される。安政元年（1854）盛岡藩15代藩主・利剛（としひさ）公は藩財政困難な折、それまで華美であった大奥の新御殿を破壊し、大奥女中衆上下300人ほどいた人数を約50人に減じている。幕府にせよ、藩にせよ、大奥を舞台とする風説、逸話は多い。

ここに盛岡藩・大奥で起こった1つの事件を紹介しよう。

盛岡藩3代藩主・南部重直公に“最上奥”という妾がいた。この女は出羽最上の出身で、江戸・吉原の遊女であったが、寛永初年に公の妾となり、同12年に江戸から盛岡に移り大奥に入ったのである。最上奥は重直公の寵愛を受けていることを良いことに藩政・人事に口を出し、公もその言葉に従ったため、家禄を得た者、寛刑にあう者も多く出るようになった。しかも嫉妬深い性格であったから、大奥に仕えていた八木沢亀子が公の寵愛を受けたことを探知すると、亀子を嫉妬し責めるに至った。亀子がすでに懐胎していることを告げると、最上奥は大いに怒り公に亀子の処分をせまった。公も亀子の懐胎を信じず、かえって事を漏らしたことを憎み、家臣に命じて殺害してしまったのである。そればかりか公はその日、盛岡を出発、参勤の途についたのであるが、最上奥はなおも怒りが治まらず、公を花巻まで追い、これによって江戸への出発ができず、花巻の滞在が10日間に及んだのである。その間公を罵り狂って止まらなかった最上奥に業を煮やした公は、金500両を与え、家臣をつけて生国最上へ帰したのである。殺害された亀子には検死の結果、懐胎していたことが判明、後に公は大いに後悔し、亀子を憐れみ、家臣・四戸下総に命じて「亀子大明神」を造営し祭ったという。

大奥は男子禁制、藩主の私生活の場であることから、この密閉された空間で生活した女中衆は、そこで起こった出来事は宿下がりした後も他言無用であった。しかし上記の内容が「南部史要」に集録されている理由は、重直公が参勤に延引し、幕府より逼塞（ひっそく）を命じられる原因になる特異性を持った事件であったことによるものであろうか……。古文書の中に、よく「……不調法の義これ有り、身帯家屋敷御取り上げ」とか「……不調法の義これ有り、閉門仰せ付けらる」という文が出てくるが、どのような不調法なのか、その理由がまったくわからない暗黒の事件が多いなか、この事件は藩主の失政、大奥の内情、そして因果関係がつぶさにわかる事件として興味深いものがある。

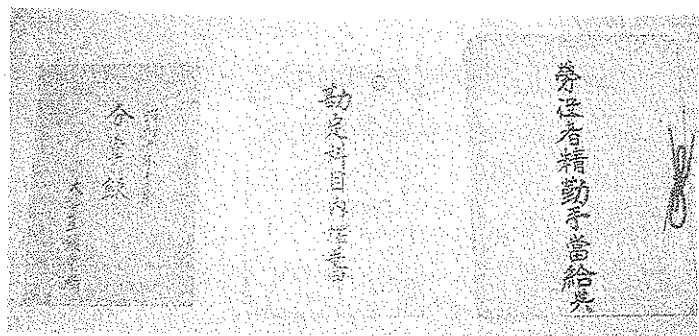
家ではだける馬あ

岩泉さ行ってもはだける

普段の生活がキチンとしていない人は、外出先で行儀良く見せようとしても地金が出てしまい失敗することのたとえ。

参考・引用資料：毛簾勤治編著『北東北のたとえ』、岩手日報社、1994。

資料は語る①



大萱生金山関係文書（寄託）

大萱生金山は、明治 36 (1903) 年に秋田県人細川寅吉によって採掘され、明治 42 (1909) 年黒沢尻の郡司半輔の手によって合資会社となり、さらに明治 45 (1912) 年には竹内鉱業会社へ、翌大正 2 (1913) 年に静岡県人村上太三郎へと経営が移ります。そして、大正 5 (1916) 年に住友合資会社の手で経営が移り、昭和 19 (1944) 年の鉱業停止まで住友が経営することになるのです。

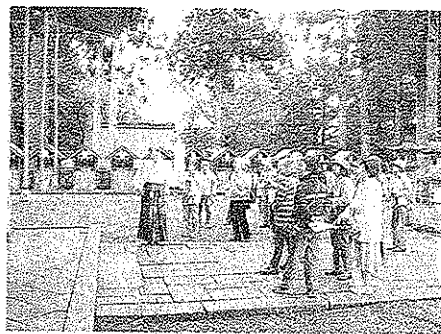
また、大萱生金山には昭和 10 (1935) 年、斎藤実元首相（内閣在職期間 1932～34）夫妻と石黒英彦知事（知事在職期間 1931～37）夫妻が来山しています。

当館には住友時代の勤務手当や経営状況を知ることができる史料や当時の写真等が寄託されています。この史料を紐解けば、大萱生金山の経営等の全体像を知る手がかりになることでしょう。

参考資料

都南村誌編集委員会『都南村誌』、都南村、1974。

細川了『大萱生金山のあゆみ』、大萱生金山里づくり実行委員会、1988。

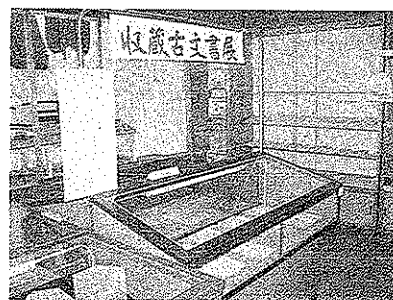


写真：志和稲荷神社にて

9月29日（火）に行った今年度の史跡・文化財めぐりは、志和古稲荷神社・志和稲荷神社・高水寺城跡・花巻市博物館・南部曲り家千葉家を巡り、バス移動の際には旧志和稲荷街道と旧奥州街道に関連する史跡などを紹介しました。

来年度も引き続き行いますので、ご参加をお待ちしております。

特別企画展「収蔵古文書展」報告

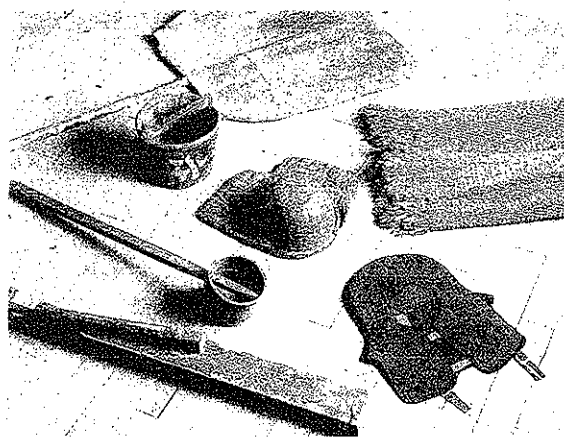


9月1日から30日まで開催した特別企画展は、今年度で最も多くの入館者を迎えることができ、多くの方に都南の歴史に触れてもらえたと思います。

市民参加展「謎の陶磁器・柳模様」報告



10月7日から11月15日まで行いました。鎌田隆コレクションを目当てにご来館するお客様も年々増えており、今回もそういった方が多く来館いたしました。鎌田隆氏のご協力に感謝申し上げます。また、市民参加展・特別企画展を宣伝頂きました報道各社に改めて感謝申し上げます。



木津屋池野藤兵衛家住宅火消用具一式

木津屋は寛永15(1638)年に萬小間物商として創業し、今日も文具事務用品等小売業として370年以上の歴史を誇る老舗です。店舗の構造は火災時に商品を避難隔離するための地下庫を設けるなどの配慮がなされており、また藩政時代から常備してきた火消用具は各種工夫がなされ、昆布で編んだ昆布ムシロは水に浸して膨張したものを通路にさげて延焼を防ぐなど類例の少ない用具も見られます。防水用具の龍吐水は木箱中の水を空気の圧力を利用して木筒の先から水を揚げる用具、逆ヒシヤクは水がかけやすいように柄を反対につけたものです。また全長182cmの火消うちわは火の粉を打ち払い、飛び火を防いだものと考えられています。これらの資料は商家の防災に対する心構えを知ることができ、当時の城下町の商家の生活習俗の特色を示すものであります。明治17(1884)年に下ノ橋監獄から出火した大火の際にも木津屋は難を免れ、防災効果が発揮された事例となっています。

参考・引用資料：盛岡市教育委員会『もりおかの文化財』,2008。

となんの昔ばなし ②

『大萱生金山』

鉄索(架空索道)は見事な物で山から山、平野から川を越えて平地へと何十本もの高い鉄塔が立てられ、大萱生から矢巾駅まで鉄索があったのです。鉄塔と鉄塔の間には太いワイヤーロープをはり、そのロープに取り付けられた何十と大きなバケツには、大萱生から鉱石をたくさん積んで矢巾駅に向けて送られ、矢巾駅からは空のバケツが返ってきました。矢巾駅で石の積み出しをしていたのです。

昭和九年か十年頃だと思えます。樋沢さんの上の方に金の精錬所が出来ました。その大きな建物で金の鉱石をくだけ、機械で金を取り出したのです。金山や精錬所で働く人たちのために大きな長屋も建てられ、大萱生は人の出入りも多くなり、役人や会社の偉い人達がハイヤー(家用車)を乗り回しました。

精錬所の下には、大きな道場もたちました。秋になると二日間もお祭りがあって、相撲、踊り、夜には道場で映画が催され、にぎやかなもので、楽しみでたまらなかつたとのことでした。